
陰陽心霊探偵所 - 後影憑き

紫雪 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽心霊探偵所 - 後影憑き

【Nコード】

N9600M

【作者名】

紫雪 海

【あらすじ】

夜歩くと死ぬという道でまた死体が発見された。

その道には『後影憑き神』という妖怪が存在しているという噂があり……。

見習いの陰陽師の双子がその捜査と解決に乗り出す！

序章：後影憑き神

夜にその道を歩いていると、ふと気付く、自分とは別にもう一つ足音が聞こえる。

音からするに、靴を履いていないそれは、ぺたぺたと音を立てながら裸足で後ろから付いてくる。

走っても、早足で歩いても、その変化に合わせるかのごとくその速さと全く同じリズムで付いてくる。

道の終わりを見つけて安心して、ふと、気付く。

足音が、ずれている……………。

先程まで自分とピッタリ合っていたそのリズムが、自分が歩くのよりも、もっと速く。

それに気付いたならば、すなわち、その足音よりも速く歩け、走れ、足音よりも早く道を抜ける、足音に追い越されてはいけない。なぜならば、追い越されたその時、足音の主に殺されてしまうから……………。

その足音の主は『後影憑き神』と呼ばれるものだと言われている。

注意深く、どんな音にも耳を澄ましその存在に気付け。

決して追い越されてはならない。

『後影憑き神』に、ご注意を。

＊

九月の始めのその日の朝、道の真ん中で一人の少女の遺体が発見された。

それは、今年に入って五人目のこの道での死者。

紫苑市鈴蘭区の街中、ビルの林立する間の狭く入り組んだ路地の奥深く、その一角にそれはあるという噂。

どんな心霊現象でも解決してくれるという場所。

『陰陽心霊探偵所』

さあ、扉を開ける準備はいいかい？

第一章：路地奥の探偵達

藪内利一^{としかず} は狭い路地の中にいた。路地はいろいろ入り組んでいて、さらに持ち前の方向オンチも最大に発揮され冗談抜きで死ぬ目を見る遭難からなんとか抜け出し、今、目的の扉は彼の目の前にあった。

「つ、着いた……やっと、やっと………」

利一は感動でそのまま扉の前で固まってしまった。

「あの………」

「君！ 聞いてくれ！ この僕の大冒険の話を！ 全ての始まりは昨日の鮎川さんの指令だった。噂に名高い心霊専門の探偵に会っためこの路地のどこかにあるという探偵所を探して一日と半日……。歩きに歩き回って、ついに僕はこの場所にたどり着いた！」

「ここつてたとえ歩き回ったとしてもせいぜい二時間ぐらいで抜けられるよな………」

「子供の足だとね。大人の足だと一時間もかからないわ」

「ドーベルマンに追い掛けられること三時間、富士の樹海に迷うこと一日………」

「隅谷さんとこの犬が、後で言っとなきゃな。というより、どんな迷い方してんだこいつ」

「すごいわね、富士の樹海からここまで徒歩って半日ぐらいかかるわよ」

「僕は……ついに目的の場所にたどり着いたんだ！」

「そうか。良かったな」

「あんた、一応相手は年上なんだから敬語使わないとだめでしょ。弟がとんだ粗相を、すいません。それより早くのいて頂けませんか？　そこに立っていられるとかなり邪魔なんです、ええ、すつごく。もうその辺りに落ちているゴミの方が立場と分別きちんとわきまえてますよね。微生物扱いする前にのいて頂きたいのですが」

「……………お前の方が存分に無礼だと思うがな……………」

利一はようやく目の前にいる二人の人物の存在に気付いた。

二人は地元の秋桜高校の制服を着ていて、双子だろう、顔がそっくりだった。少女は髪が長く後ろに垂らしていた。少年は女顔のためか、少し気弱そうに見える。

「あ……ご、ごめん。ところで君達はこんなところで何してるんだい？　此処に用事があるのかな？」

「多分あなたの探していた者達であると、断言しても良いですか？」

その少女の言葉に利一ははっ、として自分の此処に来たわけを思い出した。

「そう！　君達は探偵なんだね？　僕は君達をつ！　でも良く分か

ったね、僕が此処に来たわけが……。はっ、もしかして、僕の心を
読んだ？ すっ、すごいっ、そんなことも出来るんだ！」

「勝手に持論展開して勝手に興奮してるがさっき自分で言っただけで
こと教えた方がいいのかな？」

「放って置きましょう。その方があと役に立ちかもしれないわ。
相手が強い時、信じやすい人間ほど楽にとりに活用できるもの」

勝手に持論を展開して勝手に興奮している利一の耳にはそのどこ
か物騒な二人の言葉は届いてはいなかった。

「ま、なんであれ最終的に此処に辿り着けたってことは俺らに用が
あることで間違いないよな」

「さ、どうぞ中へ。御依頼内容、お聞かせ下さい」

そうして、利一の前にある『陰陽心霊探偵所』とプレートのある
扉は二人によって開かれた。

*

「さて、まずは……。あなたのお名前をお伺いしてもよろしい
でしょうか？」

「……人に名乗れという前に、まず自分の名前を言うべきではない
でしょうか？」

少女の言葉に利一は先程の馬鹿さ加減は一体どこに行つたのかと
いうくらい冷静に対応した。その変化に少女は少し驚いたように目
を見開いた。利一は私情と仕事で何かのスイッチが入るかのごとく
きっぱりと切り替わるのだ。

仕事モードでは結構強気だが、素のモードになると途端に気弱に
なる。

すぐ少女はその顔に微笑を浮かべると言った。

「そうですね。確かに、それは正論です。私達は依頼者にきちんと
名乗るんですよ。あなたには名乗る必要性がないと判断したのです
が」

「全体的に見れば、僕もその依頼者の一部です」

「あなたたちは複数いらつしゃるのですね。失礼ですが、名乗る前
にお聞きます。……その集団は、警察ですか？」

「はい」

利一は正直に答えた。そう、利一がもつて来たそれは、警察では
手も足もでない事件。普通の人間が解決できるとされないものだ。

と、唐突に少女が冷たい声で言った。

「お帰り下さい」

それは、突き放すような、拒否するような言い方。先程まで受け
入れる様子だったはずの少女のその態度の一変に利一は呆気に取ら

れた。

「早くお引取下さい。警察は人間の犯人を捕まえるのが仕事でしょう？ 幽霊を犯人になどとする仕事ではないはずです。むしろ拒否する」

と、手にお盆を持った少年が出て来た。

「どうした？」

テーブルに人数分の紅茶とお茶受けを置きながら聞いた。

「お客様がお帰りよ」

「えっ、せっか新作クッキー出せると思ったのに……」

どこかがっかりそうな少年の言葉。

いつもは気になる利一だが、追り返されるわけにはいかない状況なのでそのことには気付かない。

「待ってください！ 此処で引き下がるわけにはいきません！ せめて話だけでも聞いてくれ！」

もう自分達では解決できない。最後は半場やけくそな言い方になっってしまった。

「警察だと幽霊の存在を信じていないわけじゃない！ 実際僕は信じてる！」

仕事内に自分を語ることのないようにしているはずが、ぽろぽろ口から出てくる。此处で引き下がったらすぐに追い返されてしまう、そう思うと一生懸命だった。

「おい、臨……」

少年が少女の名を呼んだ。だが少女は厳しい顔をしてかぶりを振った。

「……………もういい」

少年はそう言うと利一の背を押した。抵抗しようとする利一に少年は言った。

「警察まで送る。あんたまた迷うだろ。ま、積もる話はそこでしてくれ」

「っ！？ 待ちなさい！ あんた、勝手に……！」

「お前の警察嫌いも結構。だけど、仕事にまで私情挟むんじゃない」少年はそう言うと利一の背をぐいぐい押して来た。と、少女が言った。

「分かったわよ！ ただし、話聞くだけだからね。受けるかどうかはそれからよ。ほら、とつと座った座った」

少女が利一の前に回って来て利一を中に押し戻した。

再びソファに座り気を取り直して少年が自己紹介をした。

「えっと、まずはこいつが緋狩臨、一応この所長だ。半端なく警察が嫌いなんだ。色んな意味で世話になってると言えはなってるのに全然治んない。で、俺は緋狩陣。ここの調査員みたいなもので日々所長にこき使われている可哀相な男の子だ」

「なんかえらい偏見ある紹介ね。人が警察嫌いな理由も知らないで……」

「何度聞いてもお前話そうとしねーじゃねえか。じゃあ話してみろ、今すぐ、ここで」

「……………あんたには嫌」

少女、臨は怒ったようにそっぽを向いてしまった。

「ほら、いざ聞くといつもこんななんだぜ。なんで同じ時に生まれておなじように育ったのにここまで真っ直ぐと捻くれたのに育つかね」

真っ直ぐで自分を指し捻くれたので臨を指しながら少年、陣は言った。

「ほら、お茶冷めちゃった。早く代わり持って来て」

追い立てるように臨は陣を奥に追いやった。

「仕方ないから話聞いてやるわよ。ほら、とつとと話せ」

警察だと分かった途端もう敬語を使う必要なしと判断されたよう

だ。臨の言い方はかなり適当になっている。

だがその方が利一にとっても気が楽だった。利一は一息着くと、話し出した。

「僕は薮内利一、捜査一課の刑事だ。君達は、『後影憑きの道』という噂を知っているかな？」

「ああ、区内のどこかにあるっていうお化け道のこと？ 誰かが死んだっていう話はそれなりに聞くけど、実際の所実物は知らないのよね。ね、ほんとにそんな道あるの？」

「あ、す、少し資料を持ってきたんだ。ただ、十年前から起こってるから過去全部のものとなると多くて、新しい物から三回分と今回のものだけを」

「で、その道で人が死んで警察もお手上げだから助けてくれってわけね」

「よ、良く分かったね」

「そこまで聞けば誰にでも分かるわよ。ちょっと借りるわよ」

臨は机の上に出された資料を手に取りぱらぱらと捲った。そして、しばらくして溜息をついた。

「ぜんっぜんだめじゃん。被害者にある共通点といえば皆若い女性ってことだけ。この噂についてとかは一切調べなかったの？ 大体昔誰かが殺されてその呪いでゝみたいな都市伝説の類のもの」

「あー、古いほうにならあるかもしれないな。起こるのはずっと同じ事件だからどれ持って行っても変わらないやと思つて新しいのしか持つてこなかったから……」

頼りなさそうな笑みをその顔に浮かべる利一を臨は呆れたように見た。

「陣、ちよつと出るから、後よろしく」

「ええっ！　今煎れ直したとこなのに！？　藪内さん、ちよつと待つて！」

お盆を持つて出て来た陣は慌ただしくバタバタと中に駆け戻つた。

戻つて来た陣は利一に袋を渡した。

「みやげ。このままじゃしけるから持つて歸つてくれ」

袋の中からは甘い香りがした。中を覗くと幾枚かのクッキーが入つていた。

「……君が焼いたのかい？」

「男が料理が趣味でおかしいかよ」

「あ、あたしの分取つといてくれる？」

「家にいくらか残つてたと思うけど……」

「全部母さん達に食べられてるかもじゃん！」

「また焼いてやるから、ほら、とつと行ってこい」

陣は騒ぐ臨を押し出して利一達を事務所の外まで見送った。臨は歩きながらまだ不満そうな顔をしている。

「陣君はそんなに料理がうまいのかい？」

「二年前全国料理選手権個人の部で優勝したことあるのよ。初出場の初優勝！　すごいでしょ！　でも、気が向いたときにしか作ってくれなくて、大会に出たのだって気が向いたからでそれ一回きりなのよね。あれだけの腕を持ちながら、なんて勿体ない……」

前半を楽しむそうに、後半を心底残念そうに言う臨を見て利一はぼつりと言った。

「君は、陣君が大好きなんだね。いい姉？　妹かな？　を持って彼も幸福者だね」

ピタッ、と臨が歩みを止めた。

「あたしは姉。そうだよ、大好きだ、大切な、たった一人の弟だ。だから、あたしは警察が嫌いだ。……気になつてるでしょ、あたしの警察嫌いの理由。いいよ、教えてあげる。藪内サンは、警察だけどなんか面白い人だから、嫌いじゃ無い」

臨は利一を見てにこりと笑った。そして、話始めた。彼女が警察嫌いになったその理由を。

「あれは、まだあたし達がとても小さい頃のことだった。

陣はあまり気にしない性格、っていうか、立ち直ってくれたから良かったわ。あたしはなんとなく分かったけど、陣はまだその頃生きているモノと生きてないモノの区別がつかなかった。

そんな時、一体の霊に会ったんだ。それは、陣に自分の死体を発見させた。それだけならまだいいんだ。普通に通報して、後は警察に任せておしまい。

その死体はね、人には発見されにくい河原にあったんだ。どうも上に架かっている橋から落ちたらしい。顔から落ちてその死体の顔は無残なことになっていたよ。

あたしも一緒に写真見たからさ。橋自体に転落防止の柵がついてるのに落ちるなんておかしいって話になって、あんな人気も無い、おまけに誰も見つけられない所にある死体を見つけただなんて、どう思う？

偶然？ それにしては死んで比較的すぐ見つけたものだね。

死体は死後一日ぐらいだったそうだから。そうさ、警察は陣が突き落としたりじゃないかって疑った。

その死体の人とは何の関わりも無いのに。突き落とすぐらいなら子供にも出来る、そう言ってね。

ああ、そうそう、言い忘れてたけどその死体には刺し傷があったんだ。致命傷にならないまでも、腹の下辺りに。それがちょうど陣にも刺せる位置だったのが更に疑う要因となった。

毎日警察が家に尋ねて来てはお前がやったんだろうと追究するわけでも無いがこの人についてなにか知ってるよね、って聞くんだ。

死体の写真を見せながら。あたしだって写真だけで吐きそうだったのに、実物見て、更に写真まで見せてって、どれだけ陣を追いか詰めれば気が済むんだって思った。

最近は大人数子供関わらず何するか分からない時代だしね。第一発見者「犯人？ って感じたもん。死体見つけて匿名で連絡しないと犯人扱いされかけたことも何度あることやら」

あの頃のあたしは、まだ誰かを守る術を知らなかった。今だって、あんまり進歩してないし……。出来ることはもうあんなことにあいつを近づけないようにするだけ。

「とりあえず、陣は警察の前じゃ何とか取り繕ってた。自分疑われているとは知らずに必死に捜査に協力しようとしてね。でも、その後は夢にあの死体の顔が出てくるっていつも泣いてた。結局、犯人が捕まったのは事件から二ヶ月も経ってから。

よくある恋愛云々の縛れで刺して突き落としたってさ。その後警察はどうしたと思う？ 疑ってごめんなさい？

ううん、君が協力してくれたおかげで犯人が捕まったよ、ありがとう、だってさ。

あいつはあたしよりは劣るけれど頭はいい。自分が捜査の役に立つ証言を出来なかったことぐらい気付いてる。

だから何で今まで警察が懲りずに何度も足を運んだのかも理解した。最後の最後で、自分が疑われてたってことに気付いたのよ。

善意で協力してたつもりなのに、本人にとってはやり切れないわね。そんなんだから、あたしは警察が嫌いな。ご理解頂けたかしら？ 話がかかなり長くなっちゃったわね。もう着いちゃった」

臨のその声に前を見ると、もう警察署の前だった。

「出来れば入りたく無いんだけど、資料はかなり嵩張るの？」

臨が聞いて来た。

「うん、でも持って来れない量でもから。ちょっと待っててくれ」

臨を一人外に残し利一は中へと入って行った。

*

「お、戻って来たか藪内。今度は一体どこまで行ってたんだ？二日も無断欠勤して」

「あー、今回はちょっと富士の樹海のほうまで……」

「またすごい迷いかたしたなー。ほんと、お前の思考回路どうなってるんだ？」

このままだと同僚に長い話に巻き込まれそうだ。外には臨を待たせている。少し肌寒いこの時期に外に放っておくわけには行かない。

「ごめん、ちょっと急いでるんだ。後で土産話してやるから。なんか半透明の親切な人が帰り道案内してくれたこととか……」

「お、おい……おまえ、それ……」

同僚のその問い掛けは急いで出ていく利一には届かなかった。

「お待たせ、ごめんね。あれっ……臨ちゃん？」

署から外に出ると、先程までいた臨の姿がどこにも無い。どこに、

と辺りを見渡して……。

いた。

臨は道路の前の電信柱の前にしゃがみ込んでいた。その電信柱の根元には花束やお菓子などが置かれていた。そう、そこでは一月前に小学二年生の男の子が居眠り運転のトラックに轢かれて死んだのだ。それ以来、その場所で人が死なないまでも大小様々な事故が多発するようになった。事故にあった人、起こした人、誰もが必ずこう言う。

ランドセルを背負った小学校低学年ぐらいの男の子を見た、と

男の子が電信柱の所に立って、こちらに向かって手招きしてくる。それを見た途端、意識がぼーとして気がついたら事故が起きている、事故に巻き込まれていると言うのだ。

今臨のしているその体勢は、そう、ちょうど小さな子に話し掛けるかのように……。

と、臨が利一には見えないその何かの頭を撫でる仕種をしてそれから立ち上がってこちらを振り向いた。

その顔は晴々としていたが、利一の姿を確認した途端先ほど同様何とも無いものに戻った。

「遅い。女の子をこんな肌寒い外にいつまで置き去りにするつもり

「？」

「……外で待つてゐるって言ったのは君の方なんだが……」

「確かにすごい量ね。半分持つわ」

「も、持つて帰るのかい？ それはちょっと困るんだけど……」

「こんなの持つて帰るわけじゃない。持つて帰るも大変だし、家でも置き場所困つて邪魔になるだけだし。どこかの喫茶店にでも入りましょ。この辺つて確かケーキの評判のお店があるはずだけど……」

いいながら臨は既に歩き出していた。その後を慌てて追いながら利一はこのケーキ代とかは必要経費で落ちるのかな、と不安に思った。

＊

「ふむ……」

六つ目のケーキを食べ終え食後のコーヒーで一息着きながら資料を読んでいた臨はそれを利一に返した。

「うん、内容は大体分かったわ」

「？ メモとか取らなくていいのかい？ 陣君にも教えないと……」

臨は今まで一度もメモも何も取ってはいない。利一は長い文章等を読むと大まかな所は覚えてはいるが細かい所まではわざわざ覚えていない。だが、臨は簡単に言っただけだ。

「大丈夫、口頭で充分よ。なんなら今から資料の内容をあたしが分かりやすく加工して話してあげようか？」

「いや、いいよ」

利一はすぐに否定した。そんなこととなると、あと三つくらいは確実にケーキを食べられることになる。まだおごらされる確証はないとはいえ、なんだか自分のその推測が当たりそうだという自信がある以上、利一はケーキが高いこの店できちんと財布が持つかどうか不安なのだから。

ちなみにケーキは五百円均一なり。

「で、どうするんだい？　これから現場に行くのかい？」

資料には当然現場である『後影憑き道』の場所が明記されている。そもそもその場所が分からなくて資料を取りに来たつもりだった。それに、ことが起こるのは夜だ。だが……。

「ん？　行かないよ。もう八時で外真っ暗だし。それに、何も分かんないのにいきなり行ってそれで死んじゃったらだめじゃん。危険な場所へは慎重に。」

……ま、藪内さんがどうしても行きたいって言うのなら止めないよ。一人が怖いのなら誰か誘ってどーぞ行ってらっしゃい。

でもあたしはまだ行かないし、それでなんかあったとしてもあなたが死んだとしても、関係ないし、助けない。とにかくあたしは一度

忠告したんだ。後はもう知らない。

いい、言っとくよ。危険な場所には何の対策も無く不用意に足を踏み入れるもんじゃ無い。

下手したら……本当に死んじゃうかもよ？」

「死ぬ」その言葉に利一は一瞬固まった。と、同時にそう言う臨の様子が少しは理解出来たと自分が思ったものとは別のどこか冷めたものに変わっているように思えた。

「じゃ、ごちそうさままたね」

そう言って笑顔で手を振ると、臨は席を立った。

「あっ……………」

利一が止める間もなく臨は店から出て行ってしまった。

「ごちそうさまって……やっぱりおごらされた……」。

利一は溜息を着いて椅子に座り直しもう少しこの店でゆっくりすることにした。

「んっ？」

少しして、気付いた。

『またね』ってことは……引き受けてくれた、のか？

ふと思い出して、陣から貰ったクッキーを取り出して食べてみた。

「おっ、うまい」

確かに気まぐれでしか作らないとは勿体ない腕だな、と思った。

*

「さて、これをどうしようか……？」

陣は先ほどの冷めた紅茶と新しく煎れ直した紅茶の計六つと対峙していた。捨てるのは勿体ない、でも一人で全部飲むにはちょっときつい。

「ま、幸い臨は解置いてってくれてるし。いや、おまえ置いてかれたのか？ 可哀相に。ま、それはともかく、壊、解、ちょっとその辺から三人人付合いのよさそうな霊連れて来てくれ」

解は臨の、壊は陣の式神だ。式神というものは普段出っっぱなしというわけではないが、この二匹は二人のお気に入りで常時出している。解は鳥形、壊は犬形をしている。ちなみに喋ることはできないが仕草が愛らしくえさのいらないペットを飼っている感覚だ。ち

なみに種類はセキセイインコと柴犬である。

二匹は陣のその言葉に頷くと事務所の外へと出て行った。

一分後……。事務所では人間と式神と幽霊と普通では、を乗り越してかなり有り得ないお茶会が開催された。普通では霊は実際の物を飲むことも食することも出来ないが、何故か不思議と陣の作った物は霊体にも飲むことも食することもできるのだ。そうして、視える人には賑やかな、視え無い人には危ない人が一人遊びをしているようにしか見えないお茶会は進んでいった。

「そう言えばね、この間『後影憑きの道』でまた死者が出たんだって」

聞き覚えのあるその単語に、陣は紅茶のおかわりを煎れる手をピタリと止めた。

それを言ったのは、いつでも好きなように色んな所を放浪している浮遊霊の松吹だった。彼女の旅の話はなかなか面白い。

タダで世界一周旅行をしたとか、下水道探索したとか、飛び降りしようとしている人をさんざん脅かして自殺する気をなくさせたとも自慢していた。

臨と陣はその話を聞いたときその様子を想像して自殺願望者に同情した。

偶然とはいえ霊の声が聞こえるほどの霊力を持っていて、これから死のうというのに「耳元でおばあちゃんを悲しませないでくれ」（松吹さんは別にその人のおばあちゃんなどではない）とか「どう

せ死ぬ気ならその体に移ってやろう、私がお前の恨むやつ殺してきてやるよ、その自信が無いから死ぬんだろう？」とか、極めつけは「死んだお前の魂を食らってやる！ ほら、早く死ぬ。頭からバリバリと食らってやろう。死にたての魂はどうまいものは無い」などと言われては今では亡き大好だった祖母を悲しませて死ぬ寸前に殺人犯になって死んでからも先が無くて、などということを想像したら死ぬ気は失せたようだ。

一応新たな霊を生み出さずにすんで良かったと二人は思った。

ちなみにその話から推測される日の数日後にとある超有名俳優が昔同級生にひどい苛めをしたとさまざまなメディアに告白文が届きその俳優が没落したのを新聞で見たのは二人の記憶にも新しい。

「松吹さん、『後影憑きの道』でまた死者が出たって、やっぱり今まで通りの死に方だったのか？」

急に話に食いついて来た陣な松吹は少し驚いた顔をしたがちゃんと答えてくれた。

「ええ、私は風の噂に聞いただけだけど『後影憑き神』に殺されたって子の霊が最近あの近辺に出るそうよ。自分は見えない何かに後ろから首を締められて死んだって言うんだって」

後ろから首を締められる。

足音は自分を追い抜いたはずなのに、後ろから首を締められる。その自分の首を締めるものは自分の後ろに伸びた影を媒体に出てくるといふ。そうして、首を締められ殺される。

それがあの道が『後影き神』がいると言われる由縁。

しかし、締められたはずのその跡は、体のどこにも残ってはいない。だが死体は気管圧迫による窒息死というし目撃者もないわけだから警察もお手上げというわけだ。

勝手に行ったら……また臨に確実怒られるな。でも、被害者の霊と話が出るのはこれほど手掛かりにするのにいい物はない。話をするだけなら、道に入らなきゃ良いよな……。

考え込んでいる陣の頭を解がくちばしで連打した。

「痛たたたた！！！ 痛い！！ 痛い！！ 何すんだよ、解いい！！ あ？ 臨から伝言があつた？ 忘れてんなよ！ 何だよ！」

リアルに鳥形の解のくちばしは結構痛い。『自分の力を過信するな。ちゃんと力量見極めてからにしろ、バカ』

解は臨からの伝言を目の前の紙に一字一句間違えなく書きしたためて陣に見せた。しかも異様に達筆。

「……俺が考えることもこういう風になることも全部お見通しか。何で分かったよ、ほんと、どうなってんだよ、あいつの頭の中。あとバカは余計だ！ テストの校内順位お前と同じだぞ！」

しかも毎回同じという、まさに双子の奇跡。現在も記録更新中。

本人はいないが文句を言ってすっきりした。取りあえずこんどまた夕食を臨の嫌いな人参料理で埋め尽くしてやろうとひそかに心に決めた陣であった。

だが、臨の残して行った伝言のおかげで陣はもう『後影憑きの道』に行く気をすっかり無くしていた。

なぜなら、今陣の頭の中は何の人参料理を作るか考えるので一杯だからだ。

一応食べれば美味しいと思われるような料理を作ることは陣のモットーだった。だがしかし、どんなに人参を調理しようと臨は昔食べた生煮えの人参の臭みで一度嫌いになってしまっただけで、ことごとく人参を拒否するようになった。

当時はまだ幼稚園に通っていた歳だと言っのにいつまでも好き嫌いを引きずる奴だ、と陣は呆れている。

その頃は陣もまだ臨は人参嫌いを直そうと頑張っ新作レシピを作ったものだが、今ではそれが仕返しに役立っているのが空しいものだ。

ちなみに臨自身まさか人参に泣くことになるまでは予想していなかったが、陣を一人で危険な所に行かせないという目的はきちんと達された。

自分が心配しているのを他人にその本人に知られるのは恥ずかし

い。

案外人に対して恥ずかしがりやな臨は誰かを守るのにこんな風に
してしか出来ないのだ。

そしてこの結果がこれだ。

*

翌日、臨に『また』と言われて別れた利一は自分の方から再びあの事務所へと赴くべきかどうか迷っていた。頼んだのは自分だ。やはり常識的に言って行くべきだが、行くとなるとまた一日以上かかることは明らかだった。昨日連絡先を伝え忘れたのが失敗だった、と利一は後悔していた。と、そこに鮎川警部が入って来た。そう、利一が大冒険をするきっかけとなった探偵探しを利一に指示した人物である。悲しいことかな、鮎川は利一が極度な方向オンチだということを知らない。信じてもらおうと冒険譚を語っても冗談だと笑い飛ばすのだ。まあ、そんな笑い飛ばされるような迷い方をしているのは利一なのだが。

「おい、藪内！ お前何勝手に休んでんだ！ 嫌なら最初っから警察なんかに来んじゃねえ！」

「鮎川さん、見つけましたよ、探偵達。あと無断で休んでだわけではないです。始めから言っているでしょ。僕は極度の方向オンチだと。それなら始めから僕に探させたりなんてしないでください」

すぐに反論。ちよつと強気な藪内利一、現在仕事モード。

「ほお、飽くまでその方向オンチねたで突き通すつもりか？ いま署内はお前が富士の樹海で本物に遭遇したって噂だなあ。そんな嘘では俺から言い逃れなんて出来ねえぜ。その腐った根性叩き治してやるっ！」

直後、岩が十メートル下に落下したかのような音が署内に響き渡った。

利一は捜査一課の室内で頭を抱えてうずくまっていた。

「『嘘つきは泥棒の始まり』だぞ。ま、お前のつく嘘なんてそれ以外聞いたこと無いがな。……ほら、とつとと探偵の事話せ」

鮎川は近くの椅子にドカッと座った。頭の痛さに泣きそうになりながらもこれ以上言うとまた『署内の鉄拳野郎』こと鮎川の鉄拳が飛んできそうなので利一は大人しく臨と陣の事を話すことにした。
十分後……。

「ほお、探偵は双子の地元の高校生で姉は警察嫌いで弟は料理が素晴らしく上手いと……。俺がその噂を聞いたのは十年も前だぞ、お前また俺を馬鹿にしてんのかー!!」

「まっ……鮎川さんっ！ 嘘じゃなくって……。大体探せって言つたの鮎川さんじゃないかあ！ あーっ！ 拳固めないで！」

さっきの強気は何処へやら。弱気な薮内利一、現在素のモード。

また叩かれる、と思ったとき、室内に電話の着信音が鳴り響いた。

鮎川は小さく舌打ちすると電話に出た。

「あー、何だ？ 繋げ繋げ。ほら、外線からお前にだそうだ。なんかヒカリと名乗ってる女だそうだ」

利一はその単語に反応し鮎川から渡された受話器をバツと取った。その奪い取るような様子に鮎川はちょっと驚いたようだったがすぐに納得したような表情をその顔に浮かべた。

利一はその鮎川の変化を気味悪そうに横目で見ながら電話に出た。

「もしもし」

「お、生きてるね。人の忠告ちゃんと聞けば長生きできるよ。その特性無くしちゃダメだよ。連絡先分かんないから電話したけど仕事中だったかしら？」

「いや、大丈夫だよ。あ、えっと……。鮎川さん、君達を探すように僕に指示した人が今いるんだけど、会ってもらえないかな？ その……信じてくれなくて」

なんとなく鮎川が聞いたなら怒られる気がしたので声を潜めて臨に言った。電話の向こうで臨はしばし沈黙したが、言った。

「うん、いいよ。じゃあ、これから来て……」

『後影憑きの道』まで

「まだ現場検証程度だけだね。じゃ」

その言葉を最後に電話は切れた。

「いきなり行くの!？」

入ったら死ぬとまで脅されていたので結構怖い。実は繊細な利一であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9600m/>

陰陽心霊探偵所 - 後影憑き

2010年10月10日05時16分発行